

パウロは、「『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます」（9節）と語りました。なるほど、隣人愛は「隣人に悪を行わない」（10節）という点において、あらゆる掟に通じる奥義であると言えます。けれども、「隣人を愛しましょう」といった類いの教えは、今更言われなくても、幼い頃から家庭や学校で聞かされてきました。ですので、どちらかと言えば、隣人を愛せと言われる度に感じるのは、それを実行し切れないやるせなさであるかもしれません。

パウロは「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません」（8節）と語りました。「互いに愛し合う」ということについては、借りが残ってしまうことを見据えているのです。なるほど確かに、愛し合うといっても、その愛の程度は、お互い体よく均衡のとれたものであるとは限りません。ある方が書かれた、『愛は借用書のなかに』というコラムを思い出しました。父親の遺品整理をしていた時に、給料の前借りを願い出る借用書を発見し、そこから自分に仕送りがなされていたことに気づいた、ご子息の思いが綴られています。「父が頭を下げていたとき、そのことを知らず、父に反抗していた。送られたお金で当たり前のように飲み、騒ぎ、喧嘩して、バイクを走らせていた。あの頃、わたしは何も知らなかった。けれど父が死んで分かった。あの好き勝手な時代、その背後で見えない犠牲が払われていた、と。自分の命が、頭を下げて借金する人によって支えられていたのだ、と。…あの借用書は、自分のために捧げられた犠牲の証だった。それはどのような手紙やプレゼントよりも、わたしに愛とは何かを教えてくれる」。形は違えど、私達は気づかぬところにおいて同じような愛の負債を負っているのかもしれない。

しかし、だからと言って、自分の負っている愛の負債が相手よりも大きいと思える瞬間ばかりではないでしょう。聖書が語る「隣人を自分のように愛しなさい」という掟は、ユダヤ律法からの引用ですので、それは神に対して負っている義務や返礼の形であることを意味します。主イエスの十字架を通して示された神の愛はあまりにも高く、深く、大きいので、それに返礼しようと隣人愛に励んでも、神からの愛には遠く及ばず、「借り」が出来てしまうことをパウロは示唆しています。逆に言えば、隣人を愛することができないやるせなさを感じる度に、神が、主イエスを通してどれほど私達を愛して下さっているかを知ることが出来るということになります。その神の愛に触れることから、今一度、パウロは互いに愛し合うことへと私達を送り出そうとします。

（文責：望月達朗牧師）

